

ターゲットは
あなた

井原鶴子



【人物表】

大月 信子(のぶこ) (58) スナックのママ
日陰(ひかげ) 三郎(さぶろう) (49) 印刷会社社長
森山 珠子(たまこ) (26) 元ソープ嬢の弁当屋
野瀬 秀(しゅう)平(へい) (11) 小学校5年生
野瀬 秀(ひで)勝(かつ) (24) (34)

信子「叫び声・F1」待って！ ちょっと、待ってエ！ そのエレベーター待って！」

日陰「（大声で）大丈夫ですよ！ 待ちますから」

信子「（息切れ）助かったア」

日陰「急いでるんですか？」

信子「え？ （息切れ）いや、ま、そうね」

珠子「次を待てばいいじゃない。迷惑な」

信子「（息切れ）あら、ごめんなさい。ついで。電車が閉まりそうになると乗りたいとなると同じね」

珠子「ちよつと、その小学生！」

秀平「え？ 僕ですか？」

珠子「小学生はあんただけでしょッ！」

秀平「え？ ホントだ！」

珠子「何でエレベーターのボタンを8階まで全部押さなきゃいけないのよ」

信子「落ち着きなさいよ。こんな小さい子に大声出さなくてもいいじゃない」

珠子「オバハン、ブランド物の高そうなコート着てるからって、偉そうに」

信子「まッ！ 何ですって！？」

SE エレベーターの停まる音

2F到着のブザー

秀平「オジサン、このまま『開く』のボタン押してもらえますか？」

日陰「え？ 私？」

秀平「すぐ戻りますから、お願いします」

日陰「はい、わかりました……」

信子「あら、行っちゃった」

日陰「このビル、空室ばかりだし、こんな遅くまで残ってる人なんて僅かですよね？」

珠子「人の気配ないもんなア」

信子「もうすぐ9時だっていうのに。親は何してんのかしら？」

珠子「ね、リーマン」

日陰「リ、リーマン？ ショック？」

珠子「スーツ着てんだからサラリーマンだろ？」

日陰「（納得）ああ、そのリーマン」

珠子「あたし、急いでるの。ドア閉めて」

信子「まあ、置き去りにする気？」

日陰「そんなひどいこと出来ませんよ」

珠子「まったく。階段使えよ」

信子「シッ。戻ってきたわ」

秀平「すみません！　ありがとうございます」

SE　エレベーターの動き出す音

信子「坊や、何探してるの？」

秀平「お父さんです」

日陰「ほお。このビルで働いてるの？」

秀平「はい。でも、会社が何階にあるのか忘れちゃって。幼稚園の頃、来たつきりで」

日陰「このビル、相当古いからね。来年には取り壊すって聞いているから、入っている会社も少ないんだよ」

信子「あらま。そうなの？」

SE　エレベーターの停まる音

3F到着のブザー

秀平「オジサン、また、お願いします」

珠子「駄目よ！　許さない！」

信子「少しぐらいいいじゃない」

珠子「9時半にレストランを予約してんの。だから急いでるのよッ」

秀平「ごめんなさい。直ぐ、戻りますから」

信子「行っちゃった」

珠子「オッサン、ドア、閉めてよ」

日陰「彼はまだ小学生ですよ。大人気ない」

信子「そうよ。いい年して」

珠子「60過ぎたジジイやババアに言われたくないね」

信子「んまあ！　失礼ねッ！　ホステス風情で私に意見する気？！」

日陰「（小声で呟く）私、未だ49です。髪少ないけど」

珠子「ホステスなあ？　ホステスの何が悪いか言ってみな！」

日陰「シッ！　戻ってきましたよ」

秀平「すみません！　ありがとうございます……」

SE　エレベーターの動き出す音

日陰 「お父さん、本当にこのビルの会社で間違いないですか？……」
秀平 「多分」

珠子 「ちょっと、隣のビルかもしれないってこと？！」

日陰 「何て会社ですか？」

秀平 「えーっと……わかんないです」

信子・日陰・珠子 「わかんない？！」

珠子 「ちょっと！ それって」

SE エレベーターの停まる音

4 F 到着のブザー

秀平 「オジサン、また、お願いします」

日陰 「え？ ああ。気をつけて」

秀平 「はい！……」

珠子 「行かせんじやないわよッ！」

信子 「あの子、この辺のビル、全部探してるのかしら？」

日陰 「この辺は雑居ビルだらけですよ」

珠子 「意外と空き巣狙いだったりして」

信子 「捨てられたのかも……」

日陰 「まさか！」

珠子 「ありえる。最近、多いし」

信子 「いろいろ事情があったのよ、きっと」

珠子 「何、しみじみ言ってるのよ」

秀平 「ありがとうございます……」

SE エレベーターの動き出す音

信子 「また、違った？」

秀平 「はい……」

珠子 「迷子なんじゃないの？ 警察電話したら？」

日陰 「(焦って) け、警察？！ とんでもない！」

珠子 「何、焦ってるの？」

日陰 「いや、その、大袈裟だなんて」

信子 「そうよ。こんなことでイチイチ警察に電話したら警察だって迷惑よ」

日陰 「そうですよ！」

信子「ね、携帯あるわよ。お父さんに電話したら？……あら、圏外」
珠子「はあ？ 圏外？」
日陰「古いビルですから」

SE エレベーターの停まる音

5F到着のブザー

秀平「あ！ ここかも！ オジサン、ちょっと行って見てきます」

日陰「う、うん……」

信子「大丈夫かしら？ あの子」

珠子「何が？」

信子「もしかして、頭が少し……」

珠子「なるほど。だからボタンを全部押したんだ！」

日陰「親の犯罪に加担しているのでは？」

珠子「あ！ やっぱ、空き巣の下見？ じゃあ、なおさら警察だよ」

日陰「（小声で）ウツ、そ、それは」

信子「あんな可愛い子が？ あんたじゃあるまいし」

珠子「ちよっと！ 見た目で判断しないでくれる？」

秀平「ありがとうございます……」

SE エレベーターの動き出す音

日陰「どうでしたか？」

秀平「すみません。違いました」

日陰「ここが違うとなると……フロアは、あと3つですよ」

秀平「うーん……最上階だったかなア？」

日陰「最上階って言ったら、あそこには会社が一つしか入ってませ（遮られる）」

信子「ねえ！」

珠子「揺れてない？！」

日陰「じ、地震？！」

SE エレベーターが揺れる異音

信子「地震よッ！ 地震！」

日陰「すごい揺れたッ！ た、縦揺れ？！」

珠子「うわッ！」

信子「キヤーッ！ 次は横揺れよッ！」

日陰「か、神様ッ！」

珠子「で、出なきゃ！ エレベーターから出なきゃッ！」

日陰「緊急停止！ 緊急停止ボタンをッ！」

秀平「届きませんッ！」

信子「だ、誰か！ 誰か助けてッ！」

珠子「こんなところで、死にたくないッ！」

日陰「うおッ！」

信子「ギヤーッ！」

珠子「助けてーッ！」

SE エレベーターが揺れる異音

エレベーターの停まる異音

緊急停止の音

日陰「と、停まりました……」

珠子「で、電気が！」

信子「真っ暗で何も見えない」

秀平「（泣き声）」

信子「坊や！ 大丈夫？ 暗くてどこにいるか分からないわ」

SE 珠子と信子が頭をぶつける音

珠子・信子「うわッ！ 痛いッ」

信子「この石頭！」

珠子「そっちこそ！」

日陰「（慌てて）皆さん、動かないで！ 坊やは？ 坊やは無事ですか？！」

秀平「（泣き声）」

信子「坊や、どこ？」

珠子「男なら、泣くなッ！」

秀平「（小さな泣き声）すみません」

珠子「うわッ！ 何ッ？」

信子「ヒィッ、眩しい！」

日陰「私ですよ」

珠子「オッサン、懐中電灯持ってたの？」

信子「備えあれば憂いなしですものね」

日陰「え？ ええ、まあ」

信子「坊や、大丈夫？」

日陰「そんな隅っこで泣いてましたか……」

秀平「（小声で）眩しい……」

日陰「ごめん、ごめん」

珠子「男のくせにメソメソして」

信子「男の子の方がナイーブなのよ」

珠子「はあ？ 嫌味かよ」

日陰「こっちへおいで」

秀平「うん」

日陰「怖かったでしょう？ 大丈夫ですか」

秀平「（泣き声）うん」

信子「管理人に知らせないと」

珠子「オッサン、非常用ボタン、明かりで照らして！」

日陰「はい」

珠子「そこじゃない！」

秀平「下じゃなくて上だったと思います」

信子「そうよ、そこ！」

珠子「オッサン、照らしたままね」

SE ボタンを何度も押す音

珠子「誰か！ 誰か！ 出てよッ！」

信子「応答が無い……」

珠子「押してるのに（苛立って）もうッ！」

日陰「停電灯もつきませんね……もともと壊れてたのかも」

信子「古いビルなら、最初からついてないのかもしれないわね」

日陰「しばらく待ってみましょう。エレベーターを利用する人が気付きますよ」

信子「震度何だったのかしら？」

珠子「こんな時こそ、ワンセグ携帯」

SE ワンセグ放送の受信できない音

珠子「やだ、全然映んない」

信子「まさか！ 首都壊滅……」

日陰「いえ、電波を拾ってないだけ（遮られる）」

珠子「首都壊滅？！ 早く、ここから出なきゃ。オッサン、扉、照らしてよ」

日陰「どうするんです？」

珠子「扉、開けて外に出るのよ！」

日陰「フロアとフロアの間だったらどうするんです？」

珠子「はあ？」

信子「扉が開いても、そのまま落ちちゃうわね（小声で笑う）」

珠子「そこ！ 笑うところじゃないから」

信子「あら。ごめんあそばせ」

珠子「上品ぶって」

信子「フン」

珠子「ちよっと！ あたしを照らすんじゃないッ！ 扉！」

日陰「あ、手元が狂いました。失敬、失敬」

珠子「まったく、もう。（叫ぶ）誰か！ 助けて！」

SE 扉を叩く音

珠子「（叫ぶ）誰か！ 聞こえないの？！」

信子「ダメみたいね」

日陰「中央に集まりましょうか？」

秀平「はい！」

信子「そうね」

珠子「まったく……」

日陰「懐中電灯を中心に座るとキャンプファイヤーみたいですね」

珠子「あんた、楽しそうね？」

信子「どのくらいで助けがくるかしら？」

日陰「まずは気付いてもらえないと」

珠子「自力で脱出してやる」

信子「やる気満々ね」

日陰「どうやって出ますか？」

珠子「よく、映画とかであるじゃない。天井からよ。オッサンの背中に私が乗る」

信子「そのヒール、食い込んだら痛そう」

秀平「僕、やりたいです！」

珠子「背が届かない！」

日陰「天井は無理です」

信子「どうして？」

日陰「あれば救出用の口なので、外から鍵が掛かっているのです」

珠子「嘘！ それじゃ、意味無いじゃん！」

日陰「いえいえ、意味が無いことはないのです。例えば(遮られる)」

信子「じゃ、救助を待つしかないのね？」

日陰「そういうことです。でも本当に地震でしょうか？」

珠子「エレベーターの故障？」

日陰「最近、多いですからね」

信子「どちらにしろ、神様の悪戯ね」

秀平「神様も悪戯するんですか？」

信子「(フツと笑う) 時々ね」

日陰「目的地に行かせたくないとか？」

信子「そうね。逢わせたくない人がいるとか……」

珠子「(苛立って) もう！ 携帯も繋がらないんじや、お店にキャンセルも出来ない。キャンセル料どうなるんだろ」

日陰「お店？」

珠子「表参道のイタリアンレストラン！」

信子「まあ、高そう。だからお洒落してるのね。安物みたいけど」

珠子「うるさい！ さっきから何ッ！」

日陰「(溜め息) 緊急事態なのによく喧嘩できますね」

珠子「ババアが喧嘩吹っかけてくるから」

信子「フン」

日陰「まあ、まあ、皆さん、落ち着いて。突然、動き出すかもしれませんから。少し、様子を見ましょう」

信子「じゃあ、折角だから自己紹介しましょうか？」

日陰「え？」

珠子「(バカにして) なにのんきな事を」

信子「だって知らない人とずっと一緒ってのも何だか気味悪いじゃない」

日陰「いや、でも、個人情報保護法というのがありますから、自己紹介ってどうかと」

珠子「そうそう。あんたたちのこと知ってどうするのよ」

信子「だって、一緒に死んじやうかもしれないのよ」

珠子「発想が暗すぎる」

信子「人間、いつ死ぬかなんて分からないんだし。それが今日かも。私は病で死ぬと思っ

てたけど」

日陰「縁起の悪いこと言わないでください」

秀平「僕、秀平です」

日陰「(焦って) え? しちゃうの?」

信子「秀平君ね。いくつ?」

秀平「小学校5年生。11歳です」

信子「ね、ずーっと握ってるのは何?」

秀平「作文。お父さんに見せようと思って。今日、お父さんの誕生日なんです」

珠子「(驚く) え? マジ?」

信子「お父さんの……(絶句)」

日陰「どうしたんですか? 二人とも」

珠子「いや、別に……」

信子「お父さん、いくつ?」

秀平「えーと……34歳」

信子「(沈んだ声) 34……」

秀平「塾が終わった後、お父さんを迎えにきたんです。でも、まさかこんなことになるなんて(泣き出す)」

信子「あらあら、まあ。大丈夫よ。もう直ぐ動き出すから。寒いでしょ? オバちゃんの傍にもっと寄りなさい」

秀平「(涙声) ありがとうございます」

信子「ほら、ティッシュで涙を拭いてあげる。あら、顔がちよっと熱いわね」

珠子「泣きすぎじゃないの?」

信子「どれ、額を失礼……まッ、熱いじゃないの! ね、あんた、薬持ってる?」

珠子「胃腸薬ならあるけど」

秀平「いえ、僕、大丈夫です」

信子「大丈夫じゃないわよ。ずっと我慢してたんじゃないの?」

秀平「いえ、大丈夫ですから」

日陰「私、解熱剤と水を持ってます」

信子「良かった!」

珠子「へえ! 懐中電灯の次は薬と水かア。そのバック、何でも入ってるんだ」

日陰「(焦って) た、偶々ですよ。偶々」

珠子「他に何入ってるの? ね、ペットボトル、他にもある?」

日陰「(怒って) 覗かないでください!」

珠子「(ムツとして) いつ救助が来るか分かんなかったら、水は重要だろ!」

日陰「ペットボトルはこれだけです」

信子「ね、早く飲ませてあげて」

日陰「あ、はい。スミマセン」

秀平「ご迷惑掛けてすみません」

信子「バカね。子供は遠慮するもんじゃないのよ」

日陰「さ、これを1錠口に含んで、それから水を」

秀平「(水を飲む)……水、冷たくて気持ちいい」

日陰「これから少し眠くなると思いますよ」

信子「私のコート、掛けてあげる。ほら、膝枕」

秀平「ありがとうございます」

信子「いいのよ。子供も孫もいないからね。こういうの体験したいと思ってたの」

日陰「そうなんですか……」

信子「ええ。ずっと懂れてた……」

珠子「あたしも……経験ない」

信子「あんたなら、近いうちにできるわよ」

珠子「そ、そっかな？ あんた、占い師？」

信子「バカね。20代だったら、まだまだ可能性があるってこと……」

珠子「(寂しそう) 無理無理。あたしにそんな資格ない」

日陰「資格なんて要りますか？……」

珠子「オッサン、頭悪すぎ」

信子「自分になろうと思ったならなれるわよ。私には無理だったけど」

珠子「そうなの？」

日陰「どうして無理だったんです？」

信子「それは……私の番が来たら話すわよ」

日陰「おや？ 秀平君、もう寝ちゃいましたね」

珠子「薬の効き目抜群じゃん。ね、なて薬？ 箱、見せて」

日陰「(焦って) 見るほどのものではありませんよ。その辺の薬局で売ってる薬ですから」

珠子「じゃ、見せてもいいだろ」

日陰「バックに触らないでください！」

珠子「何で怒鳴るわけ？！」

信子「シィーッ。起きちゃうじゃない……」

珠子「フン」

信子「ね、次、あんた、話なさいよ」

珠子「あたし？！ 嫌だよ。オッサンに聞かれたくない。ストーカーされたら嫌だし」

日陰「そんな暇ありませんよ」

信子「あら、お仕事お忙しいの？ 何のお仕事？ ちょっとお手を拝借」

日陰「え?!」

珠子「手相見るなら、懐中電灯で照らす？」

信子「長年の経験でね、触ると大体分かるの。あなた、サラリーマンじゃないわね」

珠子「マジ? 何者？」

日陰「(焦って) もう止めてください」

信子「あら。逃げられちゃった」

珠子「ね! あたしのことも当てる」

信子「どれ、お手を拝借……細くてしなやかな手ね。外見と違って、爪は短く整ってるけどちよっと荒れてるね。包丁で指を切ったような痕もある」

珠子「すごいな」

信子「深く切った傷痕は肉が盛り上がりってるからね。それにしても主婦以上に手荒れがひどいわ。何か商売してる？」

珠子「あたり! 今、お弁当屋さんをやってるんだ」

日陰「ほオ。経営者ですか？」

珠子「そんなカッコいいもんじゃないよ」

信子「すごいわね! 儲かっているの？」

珠子「ボチボチかな。二坪のお店でさ。ここ2年間、年中無休で頑張ってる」

日陰「この不景気ですものね」

珠子「でもさ、売れると楽しくって」

日陰「(呟く) 楽しい、か。その感覚、ここ数年ないなア(溜め息)」

珠子「1個80円のお握りがよく売れてね。100円惣菜と一緒に良く出るんだ」

信子「味もいいのね。だから売れるのよ」

珠子「(照れる) そ、そうかな？」

日陰「いい奥さんになれそうじゃないですか。それなのにさっきの資格がないってどういう(遮られる)」

信子「バカね、その話は終わりよ」

日陰「え?……」

珠子「いいよ。話す」

日陰「あ、いや、無理して話さなくても」

珠子「いい……聞いて欲しくなった……」

信子「でも、誰だって話したくないことはあるんだから」

珠子「大丈夫……あたし、珠子。真珠の珠で珠子」

信子「いい名前ねえ」

珠子「お弁当屋やるまでスープにいた……」

信子「(しんみり) 苦労したのね」

珠子「親が事業に失敗しちゃって。借金、返済しなくちゃいけなくなっさ」

日陰「親の借金のために……」

珠子「でもね、2年前、運命の出逢いがあった」

信子「まあ、ステキ」

珠子「酔った勢いで目についた看板の金貸しの店に入っね。そこでお弁当屋の夢を語ったんだ」

信子「聞いてくれたのは誰？」

珠子「その社長！ すっごく真剣に聞いてくれて、3百万貸してくれた」

日陰「興奮して」む、無担保？！」

珠子「そう！ しかも無期限で」

日陰「興奮して」ど、どこのお店です！」

信子「ちよっとオ、珠ちゃんの話、最後まで聞きましょうよ」

日陰「反省して」と、取り乱しました」

珠子「3百万で足洗って、残ったお金でお弁当屋を始めたの……嬉しかった」

信子「本当に運命の出逢いね」

日陰「下心があったんじゃないですか？」

珠子「そうだったら良かったなア」

信子「あら」

日陰「どういう意味です？」

珠子「ま、かっこよく言えば、私より、語ったビジネスプランに興味を持ってくれたってこと。返済はいつでもいいし、少し利子つけて返してくればいいからって」

日陰「そんな人、このご時世にいるんですね（溜め息）」

信子「ね、それで？」

珠子「期待に応えようって思っさ。店を閉めてから近所やオフィスビルにDM入れたりして固定客がつくまで頑張った」

日陰「感心して」すっい」

珠子「そりゃあ、辛い時もあつたよ。開店は朝の7時、閉店は夜9時でポスティングは10時頃から始めたもん」

日陰「寝る時間、ないじゃないですか」

珠子「でもさ……こんなチャンス、逃せないよ。あたしにとっては一生に一度あるかないか」

日陰「（呟く）今のところないなア……」

信子「分かる！ その気持ち！ ね、分かるわよね？」

日陰「え？！ ええ、まあ」

信子「踏ん張りどころよね」

珠子「うん。あたしもそう思っただけよ」

信子「偉いわ！」

珠子「うわッ！」

日陰「シッ！ 静かに。秀平君が起きちゃいますよ」

珠子「いきなり手握るなよ」

信子「苦労したのね……（クスン）私、苦労話に弱い」

珠子「やだ、泣かないでよ。こんなこと、大したことないよ……」

日陰「そう言えるあなたはすごいです」

珠子（照れる）「やだな。オッサンまで」

信子「いい？ 聞いて」

珠子「オバサン、握力強いね」

信子「水商売してたって普通に幸せになれるんだからね」

珠子「え？」

信子「それだけ頑張ってるんですもの。女の幸せもちゃんと手に入るわ！」

珠子（照れる）「あ、ありがとう」

SE エレベーターがゆっくり動き出す音

日陰「あ！ 動いた！」

珠子「救助?!」

SE エレベーターが停まる異音

日陰「あれ？ 直ぐ停まりましたね……」

信子「この微妙な動き、地震じゃなさそう」

珠子「6階に到着したんじゃない?!」

日陰「ほんの少ししか上昇してませんよ」

信子「ね、下手に動かない方がいいわよ」

珠子「でもさ」

信子「そのうち救助が来るわよ」

珠子（溜め息）「もう、最悪……」

信子「じゃあ、次、私ね」

日陰「え？ 続けるんですか？」

信子「当たり前じゃない。どうせ、暇なんだから」

日陰「でも……」

珠子「オッサンが先にやりたい？」

日陰「(焦って) とんでもない!」

珠子「変なやつ」

信子「私、大月信子。58です」

珠子「えッ? 58歳? 若く見える」

日陰「さっきと言ってること違います」

珠子「オッサン、余計なこと、言わないのが大人でしょ」

信子「小さく咳払い」

日陰「あ、どうぞ、続けてください」

信子「足立区でスナックを経営して、今年で30周年です。そうそう、今度来てね。あ!

これ、折角だから」

珠子「お! 名刺? サンキュウ」

日陰「いつも持ち歩いているんですか?」

信子「当たり前でしょ。どんな時でも商売繁盛! チャンスを逃さないのが信条」

珠子「(感心して) 勉強になります」

信子「ま、30周年って一つの区切りもあってね、人間ドックに入ったのよ」

日陰「いくらのですか?」

珠子「金額かよ?!」

信子「脳ドックも入れてもらったから、結構いい値段よオ。10万、超えたかしら」

日陰・珠子「10万?!」

信子「初めてだから、奮発しちゃった」

珠子「(感心して) さすが」

日陰「(羨ましそうに) スナックも順調なんですね」

信子「まあね。たまに老人ホームの団体がきたりするし、リピーターは増えたかしら」

日陰「羨ましい……」

信子「でもね、良いことばかりじゃないの。人生は良い事と悪い事、半々ってよく言うじゃない?」

日陰「そうでしたっけ?」

信子「癌が見つかったの……」

日陰・珠子「(大声で) えッ!」

信子「シィーッ。秀平君が起きちゃう」

日陰「つい、興奮して……」

珠子「でも、治るんだよね?」

信子「そうね。そう思いたいわよね……余命、長くて半年だって」

日陰「半年?!」

珠子「短すぎる！」

信子「そうなのよ！　そこ！　この残された短い時間に何をしたいか考えてみたの」

日陰「結論は出ましたか？」

信子「出た。謝りたい人がいてね。それを実行することにしたの」

珠子「誰？　それ」

信子「息子」

日陰「お子さん、いたんですか？」

信子「息子って呼んじゃいけないかもね……34年間、会ってないの」

珠子「どうして？！」

信子「22で結婚して、24の時、授かったんだけど……産んで直ぐに家の改築をしてくれてた大工と逃げちゃったのよ」

日陰「子供を置いて？！」

信子「そう」

珠子「でも……その人のこと好きだったんでしょ？　なら、しょうがないよ……」

信子「そうね。すごく好きだった。私を救ってくれたんだもの」

日陰「でも、子供を置いてまで……」

信子「悔やんでるのはそこ！」

日陰「そんなに旦那さんがお嫌い？」

信子「（溜め息）夫の両親と同居でね」

珠子「苛められた？」

信子「ううん、全然。いい人だった」

日陰「じゃあ、どうして？」

信子「夫がね……金の亡者で。自分の親の年金まで管理して、私には月3万円で賄えって。」

「ご両親には月5千円の小遣いだけ」

珠子「少な過ぎ。ひどいな」

信子「家だっけ？　と雨漏りしててね。洗面器や鍋を置いて（思い出し笑い）雨が落ちてくると音楽を聴いてるみたいだった」

SE　洗面器や鍋に落ちる雨音

信子「冬になると隙間風で寒いし。石油ストーブの火を最小にして3人で囲んで節約してたわよ。そしたら、風邪は引くは、診療代や薬代はかさむやらで夫も家の改築を渋々決心したわけ」

日陰「そこで出会った……」

信子「妊娠中に優しくしてくれたのが始まり。夫なんて家政婦みたいな扱いだもの。フラ

っていっちゃったのよ」

珠子「でも、子供は……」

信子「義理のお父さんとお母さんに泣きながら頼まれたの。子供は私たちが守るから置いててってくれって」

珠子「そっか……」

信子「正直、言っちゃうとね……やっぱり将来に不安があった。だから置いてっちゃったのね」

日陰「新しい方と上手くいかないと？」

信子「そんなことして幸せになれると思わなかったのよ」

日陰「実際はどうだったんです？」

信子「不安の中」

珠子「でも、スナックで成功してる」

信子「それは、男と別れてから。がむしゃらに働いた」

日陰「いつか息子さんと暮らすために？」

信子「いつか息子に会えるように」

珠子「一度も会ってないの？」

信子「そう」

日陰「34年間？……」

信子「そう。会えるわけない……でもね。毎年、その子の誕生日にはプレゼントを買っちゃうの」

珠子「送ってあげればいいのに」

信子「それが出来たら良かったんだけど」

日陰「あげないままですか？」

信子「そ。33個、リボンしたまま押し入れに入ってる」

珠子「(クスン) 切ない！ 切なさすぎるよーオッサン、ティッシュ」

日陰「(もらい泣き) 全部使わないでください。お二人とも本当にいいお話で……わたし、もう涙腺がゆるんじやって」

信子「人生、歩いてたら、皆いろいろあるのよね。やだわ、私まで(クスン)」

日陰「(クスン) いいこと言いますね」

珠子「(クスン) で、息子さんには会って謝ったの？」

信子「それが……まだ……」

日陰「早いほうがいいと思いますが……」

信子「あの子、私に会ってくれるかしら？」

日陰「会うに決まってるじゃないですか」

信子「(溜め息) 自信、ないな……」

珠子「でも……謝んなかったら後悔すると思う……」

信子「そうよね……私もそう思う。謝らないで死んじやったら死にきれないわ」

日陰（涙声）わかります。わかります」

珠子「おッ！　じゃあ、オッサン、次、自己紹介」

日陰「えッ？！　私？」

信子「そうよ。トリね」

日陰「私は遠慮しておきます」

珠子（怒って）何言っちゃってんの？　冗談でしょ？　空気読んでよ」

日陰「お二人には申し訳ないと思いますが……できません」

信子「何か事情でもあるの？」

日陰（焦って）あ、ありません」

珠子「なんか、怪しいなア」

日陰（焦って）怪しい？　どこがです？」

信子「この際だもの言ってみたら？　私たちもう二度と会わないと思うし」

日陰「会っちゃったらどうするんですか！」

珠子「うわあ、逆ギレ？」

日陰（焦って）す、すみません。あッ！」

SE エレベーターが急上昇する異音

日陰「ヒーツ。早すぎませんかッ？！」

珠子「助けてッ！」

信子「ここで死にたくないーい！」

SE エレベーターが停まる異音

日陰「と、停まった？」

信子「助かった……」

珠子「今ので6階についた？」

日陰「さあ、どうでしょう？　7階もしれませんよ」

信子「やだッ！　秀平くんはどこ？！　ライトで照らしてッ……」

日陰「あ！　あちらに転がってるようです」

信子（ホッとして）寝たまんま」

珠子「葉のお蔭？　効きすぎじゃない？」

日陰「私が連れてきます。ライト照らしてください」

信子「ええ。男手があつてよかったわ」

SE 日陰のバックが転げる音

珠子「あれッ?! オッサンのバックが転がつてきた! もオらいッ」

日陰「えッ?」

信子「バックより、秀平くんが先!」

日陰「た、珠子さん、触らないでください」

珠子「いいじゃん別に。見せてよ」

日陰「ダメですって」

信子「こんな狭いところで走り回らないで。揺れて怖いじゃない!」

珠子「(面白がつて)何がでるかな?」

日陰「止めてください!」

珠子「信子さん、ライト照らして!」

信子「もう」

日陰「ダメですッ!」

SE 日陰のバックの中身が散乱する音

珠子「何? これ……」

日陰「バック、返してください」

珠子「説明するまで返さない」

日陰「そんな必要ないでしょう?」

信子「(優しく)仕事の道具?」

珠子「ありえない! ガムテープなんて何に使うわけ? そもそもサラリーマンが登山用のロープやナイフなんて持ち歩く? 睡眠薬まであるじゃない」

信子「何でも売ってる営業マンとか」

珠子「(呆れる) どんだけ人がいいの…… (怒つて) 何しにここにきたのか言えよ」

日陰「何しに……用事があつて」

珠子「どんな用事!」

日陰「そ、それは……」

信子「ね! 自己紹介の続きしましょうよ」

珠子「はあ?」

信子「この人の話、聞きましょう」

日陰「私の? 話すことなんてありません」

信子「話したくないことは無理してはなさなくてもいいのがルール」

珠子「ちよっと！ 信子さん！ 殺人鬼だったらどうするの？！」

信子「私にはそう思えない。この人の手、すごく実直そうな手だった」

日陰「信子さん……」

信子「ね。二人とも、座って！ あ、その前に秀平君、ここに連れてきて」

日陰「分かりました」

珠子「（舌打ち）」

信子「秀平君、よく寝てるわね」

珠子「大物になるよ」

信子「で、お名前は？……」

日陰「日陰です」

信子「何してる人？」

日陰「印刷会社を経営してます。いや、してたつて言う方が正しいですね。実質、3年も輪転機回してないですから（溜め息）」

信子「たくさん刷る時に使う機械？」

日陰「はい。たくさん刷ることもなくなりました。普段なら見向きもしない小さい仕事まで大手に根こそぎ持ってかれますから」

信子「分かるわ。うちのお客さんでも印刷会社の方、めっきり来なくなったもの」

珠子「そうなの？」

信子「お歳暮を持って会社にご挨拶に行ったらもぬけの殻つてのも何度かあったわね」

日陰「弱者に冷たい時代です」

信子「ご家族は？」

日陰「え？……いません」

珠子「（呟く）指輪してるくせに」

日陰「先月、子供を連れて出て行きました」

珠子「マジ？」

信子「まあ。ホントはこういう時こそ、奥さんとお子さんに居て欲しいのに」

日陰「そうなんです。私もそう、妻に言い聞かせました。何度も何度も……」

信子「それでも出て行くなんでよっぽどね」

日陰「金の切れ目が縁の切れ目ですよ。仕事が取れないから借金がかさむし。その内、借金返せと銀行や大手の消費者金融は攻め立てるし、妻のパート代も借金に消えていく始末で子供の給食代も払えない有様でしたから」

珠子「うちもそんなだったな」

信子「自己破産は考えた？」

日陰「まさか！ そんなことしたら、亡くなった父と母に顔向けできません。家も工（こう

場(ば)も両親が寝ないで頑張って創り上げてきたんですから」

珠子「なんだ。家も土地もあるんじゃない」

日陰「もちろん抵当に入ってます」

信子「近いうちに持ってかれるのね？」

日陰「ええ。だからお金が必要なんです」

珠子「それこそ焼け石に水。だって仕事が無くてお金が入ってこないんでしょ？」

日陰「工場があれば仕事ができるんです。だからまずは返済金を払って、その間に仕事を取ってきます」

信子「次の支払日まで？ 自転車操業ね」

日陰「当てはあるんです。いいお話があるんです。それなのにどこも貸してくれない」

信子「消費者金融も経営が厳しいから」

日陰「だから、私、この間断られましたけど、また頼んでお借りしようと……」

珠子「もしかして、8Fの野瀬ファイナンス？！」

日陰「はい」

信子「(動揺して) あ、相手は野瀬秀勝？」

日陰「そうですけど、皆さん、何で？」

珠子「ちよっと、ヤダ、もしかして……皆、目的地は、一緒？」

信子「やっぱりそうだったか」

日陰「えッ？！ そうなんですか？」

珠子「でもさ、信子さんも借金しに？」

信子「(動揺して) わ、私は……」

日陰「野瀬秀勝は野瀬ファイナンスの社長ですよ。他にどんな用件があるんです？」

珠子「それより、オッサン。金借りに行くのにこの重装備っておかしくね？」

日陰「(唾を飲み込む) そ、それは……」

珠子「何？」

日陰「前回、借金を申し込んだ時に断られたんです。だから妻が出て行ったんです。だから……」

信子「だから？」

日陰「だから、今日は有無を言わさないようにと……」

SE 気持ちが沈む音

珠子「まさか、殺しにきたわけ？」

信子「え？！ そんな……嘘でしょう？」

日陰「わ、私も暴力は嫌いです。ですから何も言わずに貸してくれれば(遮られる)」

珠子「貸さなかったら、殺すってこと?！」

日陰「それは……そうならないと思いますが、そうしなければ家や工場を守れないし、妻や子供も戻ってこない……その場合は仕方がないじゃないですか！」

信子「(叫ぶ) やめてッ!」

珠子「(恐々) 信子さん……そのナイフ、オッサンのだから。ね、どうしたの? 危ないよ」

信子「殺すなんて許さない! そんなことしたら、私があんたをここで殺す!」

日陰「わ、私を?」

珠子「信子さん、もしかして野瀬秀勝って」

秀平「僕のお父さんだよ」

信子・日陰・珠子「(驚く) えッ?!」

秀平「僕、眠ってました?」

珠子「そうよ。どう? 気分は」

秀平「さっきより随分いいです」

珠子「どれ?」

秀平「うわッ! 手、冷たいッ」

珠子「熱なし! 薬、効いたなあ」

信子「この子が、秀勝の……」

珠子「信子さんの孫ね」

日陰「じゃあ、信子さんの息子さんって」

信子「野瀬秀勝……」

秀平「お父さんの知り合いですか?……」

珠子「お父さんのお母さんだって。だから秀平のお祖母ちゃん」

秀平「お祖母ちゃん?……」

珠子「(恐々) 信子さん、もうナイフ要らないでしょ。ね、バックに入れて」

信子「そ、そうね。はい、これ」

珠子「(溜め息) もう……」

日陰「(呟く) 助かった……」

信子「ね、秀平君、顔を見せて……目元なんか秀勝そっくり……」

秀平「それ、偶然です」

信子「え?」

秀平「僕とお父さん、血が繋がってないですから」

珠子「(恐々) お母さんの連れ子?」

秀平「お母さんなんていないです」

信子「え?」

珠子「(呟く) やった!」

信子「お母さん、どうしたの？」

秀平「僕はお母さんに捨てられて、お父さんに拾われたんです」
日陰「拾われた？」

珠子「秀平、何でそんなこと知ってんの？」

秀平「それは……お父さんに言わないでいてくれますか？」

信子「もちろん、言わないわよ。ね、皆」

日陰・珠子「もちろん」

秀平「お父さんの日記に書いてました」

信子「日記？ 秀勝が？」

秀平「はい。僕、学校で漢字を習うようになって本棚の小説を漁ってたら、お父さんの古い日記もあって」

珠子「普通、そんなとこ置く?!」

秀平「業務日誌って書いてました」

珠子「納得。確かに日記みたいなものだわ」

信子「何て、書かれてたの？」

秀平「2000年4月1日。O×荘へ遅延金督促……」

SE 扉を激しく叩く音

秀勝「約束の期日、過ぎてますよ!」

SE 扉を激しく叩く音

秀勝「おい! 出て来いよッ! 隠れても無駄だって!」

SE 扉を激しく叩く音

秀勝「出て来い! ってんだよッ!」

SE 扉を蹴り倒す音

秀勝「(息切れ) ったく。余計なことさせやがって。うわーッ! やられた! もぬけの殻
かよ! (舌打ち) ついてねえなァ」

SE 赤ちゃんの激しい泣き声

秀勝「マジかよ？！……お前も置いてきぼりか」

SE 赤ちゃんの泣き声

秀勝「ちっちゃい手だなあ。おい、髭、はやしてる途中なんだ。引っ張んじゃねえよ。よしッ、仕返しだッ（嬉しそうに笑う）」

SE 赤ちゃんの笑い声

秀平「その赤ん坊が僕なんです」

珠子「（呆れて）ウッソ！」

秀平「本当です……」

信子「（泣き出す）」

珠子「信子さん……」

秀平「僕、お父さんに拾われて、ホント、ラッキーでした」

信子「（大声で泣く）」

珠子「（焦って）の、信子さん、大丈夫？」

信子「（涙声）お父さん、優しい？」

秀平「はい！ とっても！」

信子「（泣き出す）……」

珠子「ね、オッサン。ここから出たらどうする？」

日陰「え？」

珠子「目的を果たす？」

日陰「そ、それは……」

珠子「私のバックに350万ある。それあげるから、そのまま帰って」

日陰「あげる？！」

珠子「そう。使って」

日陰「でも……」

珠子「お金返して、デートに誘うつもりだったけど、ほら、もう、それも無いし……」

日陰「どうして私に……」

珠子「私の恩人を傷つけないで。それに……幸せの連鎖があってもいいだろ？」

信子「（涙声）私も。振込先、教えて。どうせ、あの世には持っていけないもの」

珠子「信子さんはダメ！」

信子「（涙声）あら、ひどいじゃない？」

珠子「息子さんやお孫さんと思いで作るのに使うの！」

信子「え？」

珠子「たくさん思い出、作ってあげて」

信子「珠ちゃん……（泣き出す）」

珠子「涙、壊れた水道管みたい」

信子「（涙声）あんたが泣かすから」

秀平「何の話ですか？」

珠子「大人の話」

秀平「（ふてくされて）僕だけ仲間はずれ」

日陰「あのう……」

珠子「350じゃ足りない？」

日陰「いえ、まさか！ それだけあれば差し押さえも待ってもらえます。そしたら妻も戻ってきてくれると（遮られる）」

信子「（鼻をすすりながら）奥さん、ホントにお金が無いから出て行ったのかしら？」

珠子「あたしも、違うと思う」

日陰「え？」

信子「まだ分からない？」

珠子「執着しすぎ」

日陰「何に？」

信子「家と工場によ……」

日陰「それはですね。さっきも申し上げた通り、父と母が苦勞して（遮られる）」

珠子「奥さんや子供よりも大事？……」

日陰「（戸惑う）それは……」

信子「一からやり直すほうがいいんじゃない？……」

日陰「（ムツとして）手放さってことですか？」

信子「家と工場を守ろうとするから借金が増えるのよ」

日陰「それは仕方ないことです。私の行動が間違っていると仰りたいんですか？」

珠子「そう。家と工場を売れば問題は解決。借金はグンと減るし、奥さんも戻ってくる」

信子「再就職は難しいかもしれないけど」

珠子「借金に追いまくられるよりマシ」

日陰「そんな……皆、一緒ですね。成功している人には私の気持ちなんて分からないんですよ。あの男にも言われました。私が間違っていると……でも、あなたたちは何にもわかつちやいない。私は両親の血と汗と涙の結晶を大事にしたいだけなんです！」

信子「それが、自分の家族より大切なの？ おかしいじゃないの」

日陰「どこがおかしいんです？」

信子「(怒って) 目を覚まさない!」

SE 日陰の頬を殴る音

珠子「(驚いて呟く) あ、殴った……」

日陰「(驚いて) 痛いじゃないですか!」

信子「ご両親はもう亡くなっているのよ! 建物や土地なんかより、家族や血を分けた子供の方が大事でしょうがッ!」

日陰「自分だって家族を捨てたくせに」

信子「だから、言えるんじゃないのよッ! あんたもあの頃の私と同じ! 現実から逃げてるだけじゃないのッ!……」

日陰「逃げてる?……現実から?」

信子「いつか向き合わないといけないの! その時、私みたいに後悔することになるのよ。それでもいいのッ?」

日陰「(泣き出す)」

珠子「オッサン……」

秀平「オジサン、これ……」

日陰「(涙声) 1万円?」

秀平「お小遣いとお年玉、貯めた分です。よかったらこれ使ってください」
日陰「秀平くん……(泣き出す)」

SE エレベーターの動き出す音

珠子「な! 何コレ!」

日陰「(涙声) 下に動いてます」

秀平「随分ゆっくりですね」

信子「ああ、神様!」

SE エレベーターが停まる音

4階到着のブザー

珠子「あ! 扉が開いた……」

日陰「開きました!」

信子「開いたッ!」

SE エレベーターの異音

秀平「あれ？ 変な音が……」

SE エレベーターの異音

信子「(焦って) は、早く出ましょう！」

日陰「(焦って) わ、私の荷物！」

珠子「(焦って) そんなの後でにしまッ！」

日陰「(焦って) え？！ でもッ！」

秀平「(焦って) オジサン、早くッ！」

SE エレベーターが落下した破壊音

日陰「(言葉にならない) あわわわわわ！」

珠子「エ、エレベーター、壊れたよね？ 完全に」

信子「(ホッとして) 助かった……」

秀平「救助の人、誰もいませんね？」

珠子「ここ、何階？」

秀平「4階みたいです」

信子「日陰さん……」

日陰「(大泣き)」

SE 救急車やパトカーのサイレン音

珠子「(溜め息) 今頃、来てるよ！」

秀平「階段から誰か来ます！」

SE 階段から駆けてくる足音

秀勝「(息を切らして) 秀平！」

秀平「(嬉しそうに) お父さん！」

秀勝「大丈夫だったか？！」

秀平「うん！」

珠子「社長が、救急車、呼んでくれたの？」

秀勝「ああ。まさか君も乗ってたとは」

珠子「うん……それとき、この人」

信子「（焦って）私はいいの。帰るわ」

珠子「信子さん、折角、来たのに！」

秀勝「（眩く）信子？」

信子「（躊躇う）で、でも……」

秀平「僕のお祖母ちゃんだって……」

秀勝「母さん？」

信子「（焦って）突然、来てごめんなさい。話が……いえ、また、出直してくるわ」

秀勝「話？　どんな？」

日陰「（鼻をすすりながら）大事な話です。聞いてあげてください」

信子「日陰さん！」

秀勝「あなた……またいらしたんですか？」

日陰「いえ、その、わ、私は……エレベーターの中で皆さんと話しているうちに間違いに気づきまして」

秀勝「間違い？」

日陰「ビルを間違えたんです」

信子「（小声で）日陰さん……」

日陰「ですから、私はもう帰ります。妻と子を迎えに行かなければなりませんし。皆さんとはここで失礼します」

珠子「ね、オッサン！　これ、いいの？」

日陰「今の私にあなたのバックは不要です」

珠子「（嬉しそうに）そっか。わかった」

信子「日陰さん、待って！」

日陰「信子さん……」

信子「さっきはごめんなさい。痛かったでしょう？　私、夢中で」

日陰「いえ、お礼を言うのは私の方です」

信子「そう言われると嬉しいけど……」

日陰「これ」

信子「1万円？」

日陰「秀平君に返しておいてください」

信子「わかった。奥さん、きつと喜ぶわよ」

日陰「（嬉しそうに）信子さんも頑張ってください」

信子「（気が重そうに）ああ……そうだった。あたしにはまだ試練が残ってた」

日陰「あなたなら大丈夫ですよ。では……」

珠子「行っちゃった。信子さんのビンタ、相当効いたな」
信子「やめてよ」

珠子「でも変な一日だったア」

信子「最悪で最良の一日」

珠子「言えてる。これが神様の悪戯か」

信子・珠子「(小さく笑う)」

秀平「お祖母ちゃん、珠子さん、お父さんがご飯一緒につて」

信子「え?!」

珠子「マジ?! 喜んで!」

信子「(戸惑う・小声で)わ、私、どうしよう……行く? 行かない? いいえ、行く。(大声で)行きます。行きますってば! 皆、待ってエ!」

(了)

ターゲットはあなた

2014年3月16日 発行

著者 井原鶴子

発行者 李鳳龍(オオハラ.李.ヒデハル)

発行所 描楽書蔵
郵便番号 135-0016
東京都江東区東陽1-28-13-401
お問い合わせ oohara.lee@ka-kuzo.jp
サイト <http://www.ka-kuzo.jp>

本作品のコピー、印刷、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本作品を代行業者等に依頼してコピー、印刷、スキャン、デジタル化する事はたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。